

記銘項目の再生可能性と単純接触効果の関係について

八木善彦
菊地 正

筑波大学人間総合科学研究科
筑波大学人間総合科学研究科

過去に接触経験のある刺激（既接触刺激）に対しては、そうでない刺激と比較して、好意度評定値が増加することが知られている（単純接触効果）。しかしながら、これまで、既接触刺激の再生あるいは再認成績と単純接触効果量との関係については、一致した見解が得られていなかった。本研究では、指示忘却手続きを用いることで、既接触刺激の再生可能性を操作し、単純接触効果量との関係を検討した。実験の結果、忘却指示が行われた項目については、単純接触効果が消失することが明らかにされ、既接触刺激の再生成績と単純接触効果量の間に正の相関関係が存在する可能性が示された。

Keywords: 単純接触効果, 再生, 指示忘却.

問題・目的

ある刺激に繰り返し接触するだけで、その刺激に対する好意度評定値が増加する現象を単純接触効果と呼ぶ (Zajonc, 1968)。この現象には、接触経験のある刺激(以後、既接触刺激)に対する記憶が、何らかの形で関与していると考えられる。にもかかわらず、これまで、既接触刺激の記憶成績と単純接触効果量との関係については、一貫した知見は得られてこなかった。例えば、Fox and Burns (1993)では、既接触刺激の記憶成績が高い状況ほど、より大きな単純接触効果が認められることが報告され、両者の間に正の相関関係が存在する可能性が示されている。反対に、Bornstein (1989)が先行研究の結果に対して行ったメタ分析からは、既接触刺激の記憶成績が低い状況ほど、より大きな単純接触効果が認められることが報告され、両者の間に負の相関関係が存在する可能性が示されている。また、神経心理学的研究からは、既接触刺激を殆ど再認できない記憶障害患者においても、頑健な単純接触効果が生じることが明らかにされ、両者の関係が独立である可能性が示されている (e.g., Marie et al., 2001)。

本研究の目的は、既接触刺激に対する記憶成績と単純接触効果量との関係を明らかにすることである。これまでこの問題に明確な結論が得られてこなかった原因の一つは、既接触刺激の記憶を利用可能な程度（以後、記憶の利用可能性）を直接操作した研究が行われていないことにあると考えられる。そこで本研究では、記憶の利用可能性を操作するための代表的手続きの一つである指示忘却手続きを用い、記憶の再生成績と単純接触効果との関係を検討した。

指示忘却手続きにおいて、参加者は、複数の項目から構成される記銘リストを、前半と後半に分けて呈示される。前半と後半の間に、半数の参加者のみ、これま

で呈示されていた項目を全て忘れるよう求められる。ただし実際には、後続する再生課題において参加者は、忘却指示の有無にかかわらず、全ての記銘項目を再生するよう求められる。多くの先行研究において、忘却指示を受けた参加者群の前半項目（以後、忘却指示項目）の再生成績は、他の全ての項目と比較して、有意に低下することが明らかにされている。この現象は、様々な検討により、参加者の反応バイアス（つまり、忘却指示項目に対する再生を意図的に控える）では説明困難であることが実証されているため、忘却指示項目に対する能動的な抑制処理過程を反映していると考えられている (レビューとして、Golding, 2005)。

したがって、既接触刺激の記憶の利用可能性が単純接触効果量を規定するとすれば、忘却指示の有無が単純接触効果量に影響を及ぼすと予想された。

実験1：再生課題

目的：本実験は、忘却指示により、記憶の利用可能性が低下することを保証する目的で行われた。

方法：筑波大学の大学生および大学院生 32 名が実験に参加した。刺激として、林 (1976) のノンセンスシラブル新規準表から、片仮名 2 文字の無意味な文字列 (例えば、“テユ”) 64 語が選択された。実験は、学習課題、妨害課題、再生課題から構成された。学習課題 上述の 64 語からランダムに選択された 20 語が刺激として用いられた。参加者は、1 試行につき 1 語呈示される文字列を出来るだけ多く記憶するよう求められた。1 試行における刺激の呈示系列は、注視点 1 秒、文字列画面 1 秒、空白画面 1 秒で構成された。記銘項目 20 語は、休憩を挟んで前半呈示項目と後半呈示項目に半数ずつランダムに振り分けられた。前半 10 項目が各 3 回ずつランダムな順序で呈示された後、短い休憩が設けられた。この際、参加者の半数(忘却指示有り群)には、忘却指示¹が行われ

た。残りの半数の参加者（忘却指示無し群）は、前半と同様に後半の項目を記憶するよう求められた。休憩の後、後半 10 項目が、前半と同様に呈示された。妨害課題 学習課題の後、参加者は 90 秒間のパズル課題を行うよう求められた。

再生課題 続いて参加者は、忘却指示の有無にかかわらず、全ての項目を再生するよう求められた。この際、忘却指示有り群は、忘却指示項目の再生を意図的に控えることのないよう強調された。

結果と考察： Table 1 に、各条件の再生正答率を示す。忘却指示有り群の前半項目（忘却指示項目）における再生正答率と、忘却指示無し群におけるそれを t 検定によって比較したところ、前者は後者を有意に下回ることが明らかにされた ($t(15) = -1.80, p < .05$)。これらの結果は、本実験で用いられた忘却指示が忘却指示項目の記憶の利用可能性を効果的に低下させていたことを示している。

Table 1. Mean proportion correct (and SE) on recall task as a function of serial-position of items and instructions of forgetting.

忘却指示	記銘項目の呈示時期	
	前半	後半
有り群	25.6 (3.8)	39.3 (5.0)
無し群	35.0 (3.6)	42.5 (3.9)

実験2：選好判断課題

目的と方法： 実験 1 とは異なる大学生および大学院生 32 名が実験に参加した。本実験の手続きは、妨害課題終了後に、再認課題ではなく、選好判断課題が用いられた点を除き、実験 1 と同様であった。

選好判断課題 参加者は刺激画面の左右に同時呈示される二つの文字列のうち、より好ましいと感じられる一方を選択するよう求められた。一試行における刺激の呈示系列は、注視点 1 秒、刺激画面(反応まで)、空白画面 1 秒で構成された (全 20 試行)。参加者には、この課題が記憶課題とは無関係な印象調査であると伝えられた。したがって、判断は、純粋に好意度に基づいて行うよう強く求められた。

結果と考察： 各条件において、既接触項目をより好ましいと選択した割合（既接触項目選択率）を Figure 1 に示す。条件毎の既接触項目選択率とチャンスレベル（50%）を t 検定により比較したところ、忘却指示有り群の前半呈示項目（忘却指示項目）を除く全ての項目について、チャンスレベルとの間に有意な差が認められた (t 値はいずれも 1.85 以上)。これらの結果は、忘却指示項目についてのみ、単純接触効果が消失したことを表している。

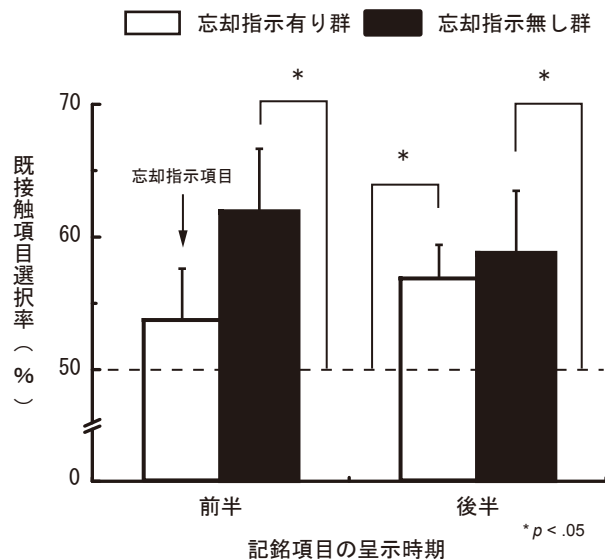


Figure 1. Mean selection rate of pre-exposed items as a function of serial-position of items and instructions of forgetting. Error bar represents SE. Dashed-line indicates chance level (50 %).

結論

実験 1 の結果は、本研究で用いられた忘却指示手続きが、忘却指示項目における記憶の利用可能性を効果的に低下させていたことを示している。また、実験 2 においては、こうした項目についてのみ単純接触効果が消失することが明らかにされた。したがって、本研究の結果は、既接触刺激の記憶の利用可能性と単純接触効果量の間、正の相関関係が存在することを実証していると考えられる。

脚注

¹具体的には、「これまで呈示されていた刺激は全て妨害刺激であり、実験の真の目的は、妨害刺激の影響を排除しながら、後続して呈示される項目をどの程度記憶可能であるかを調べること」と伝えられた。

引用文献

- Bornstein, R. F. 1989 Exposure and affect: Overview and meta-analysis of research, 1968-1987. *Psychological Bulletin*, 106, 265-289.
- Golding, J. M. 2005 Directed Forgetting Tasks in Cognitive Research. In A. Wenazel & D. C. Rubin (Eds.), *Cognitive methods and their application to clinical research*. Washington, DC: American Psychological Association. Pp. 177-196.
- Fox, S. E., & Burns, D. J. 1993 The mere exposure effect for stimuli presented below recognition threshold: A failure to replicate. *Perceptual and Motor Skills*, 76, 391-396.
- 林貞子 1976 ノンセンスシラブル新規準表 東海大学出版会
- Marie, A., Gabrieli, D. E., Vaidya, C., Brown, B., Pratto, F., Zajonc, R. B., & Shaw, R. J. 2001 The mere exposure effect in patients with schizophrenia. *Schizophrenia Bulletin*, 27, 297-303.
- Zajonc, R. B. 1968 Attitudinal effects of mere exposure. *Journal of Personality and Social Psychology Monograph Supplement*, 9(2, Pt. 2), 1-27.